Since2020.4

SPECIAL 1 INTERVIEW

イ イ ピュー

EI EI PHYU

2018年3月ミャンマーより介護を学ぶために来日。2020年3月西九州短期大学部卒業、介護福祉士取得。来日当初は日本食に抵抗を感じていたが、今では『緑茶やラーメンも食べられるようになったけど、日本のお米が一番好き！回転寿司に行ってアボカドロールをよく頼みます！』と言うくらい。キュートな笑顔がとても印象的である。

写真：徳村こゆき
インタビュー：戸田亜由美

―医療・福祉の仕事を選んだきっかけは何ですか？

「子供の頃から誰かのお世話をすることが好きでした。祖母が病気をして薬を飲まないといけない状態になった時も、私が薬を持って行かないと飲まなかったので、学校から帰ったらまず祖母に薬を飲ませることが日課となっていました。社会人となり小学校の先生として働いている時に、施設でボランティアをすることがありました。ミャンマーは医療・福祉の制度や技術が発展していないので、病気になる人や感染症が起きやすく、この状況をどうにかしたいと思うようになりました。だから、介護の技術が発達している日本で勉強をしたいと思いました。姉からは、介護は汚い仕事もあるし、きついから辞めたらと言われたことがあります。当然、オムツ交換や入浴介助など汚いとかきついと思われる仕事もありますが、そういった仕事をした後は相手の体が綺麗になることはもちろん、自分の気持ちも綺麗になるように感じます。私は姉に反対された時もありましたが、自分の意志で介護の仕事をすることを選びました。」

―母国を離れることに抵抗はありませんでしたか？

「もともと外国に行きたい気持ちと、日本の介護の技術を学びたいという気持ちがありました。姉が東京に住んでいたこともあり、治安が良くみんな平等で、差別がない国だと、日本の良さをたくさん聞いていたので母国を離れることに抵抗はありませんでした。日本語は日本に行くことを決めてから勉強を始めました。日本語は漢字、平仮名、カタカナ、ローマ字と種類が多く難しい言語だと思います。今は少しずつ慣れてきて、“褥瘡”や“誤嚥”など難しい漢字も字を見れば意味がわかるようになりました。それでも時々難しい言葉がある時は職場の人に聞いたりして勉強しています。勉強の仕方も、ミャンマーは参考書を読み自分で勉強をするスタイルなのですが、日本は人前で発表したり、教えあったりして勉強していくので、日本の教育システムの方が好きです。将来子供ができた時には、日本の教育を受けさせたいと思いました。」

―仕事のやりがいは何ですか？

「介助をした時に利用者から『ありがとう』とか『ごめんね』と言われるときに、人の役に立っていることを感じます。私は『ありがとう』という言葉が大好きです。この言葉をかけてもらえるので、大変だと思うことが減りました。利用者と話をすることも好きで、利用者と意思疎通ができた時はすごく嬉しいです。方言は難しいですが、相手の表情や仕草を見れば何を伝えたいかが分かるようになりました。今は『うんにゃ』とか『せんでよか』とか自然と出てくるので、職場の人にびっくりされています(笑)。」

―これからの目標を教えて下さい。

「ミャンマーの福祉施設で日本語を教えたり、介護技術を教えたりすることが大きな夢です。その為にはJEES(日本語教育能力検定)とJLPT(日本語能力試験)を受けたいと思っています。まだまだ日本で勉強することがたくさんあります！」

写真：徳村こゆき
インタビュー：戸田亜由美

Since2019.8

SPECIAL INTERVIEW 1

小野 光子

MITSUKO ONO

感染委員会副委員長。正看護師の資格を持ち、病院勤務を経て当法人へ入職。2020 年 3 月には介護支援専門員の資格取得。現在はケアマネジャーとして勤務しており、利用者や家族に寄り添い在宅復帰の支援を行っている。

―医療・福祉の仕事を選んだきっかけは何ですか？

「看護師になろうと思ったのは、高校生の時でした。みんなから頼られる存在で、憧れたのがきっかけです。約20年看護師として病院で勤務をしてきました。看護師として処置等はもちろんですが、患者さんの移乗介助もしないといけません。これが結構大変なんですよね。きついなと思うことがよくありました。同僚に、介護職から看護師になった人がいて、その人の移乗動作や体位変換の仕方がすごく上手で丁寧でした。その姿を見て、介護の仕事にも興味を持つようになりました。」

―仕事をする上で難しいと感じることは何ですか？また、壁にぶつかった時はどのように乗り越えていますか？

「老健は在宅復帰が一番の目的となります。私から見たら在宅復帰してもまだまだ不安があるなと感じる所も、本人や家族はお互いを心配させないように『大丈夫。できるよ。』と話されることが多い気がします。だから在宅復帰後にどんなことに困られるか、どうすれば生活しやすくなるかを見つけ出すことに難しさを感じます。行き詰った時や分からないことは、先輩ケアマネや介護、リハビリのスタッフに自分が納得いくまで聞きに行きます。ケアマネの仕事は奥が深く、まだまだ勉強中です！」

―感染症に対しては色々勉強をされてきたと思いますが、コロナの状況をどのように感じますか？

「今まではすぐに個室隔離をし、使用した物はその場で捨てるという対応で済んできましたが、コロナは今までの感染症と全然違う未知の世界だと感じています。前例がなくデータが無いので手探りの状態です。感染対策で日常生活が変化していく中、利用者や家族の要求に答えていくために、みんなで知恵を出し合っています。」

―おうち時間が増えたと思いますが、どのように過ごされていますか？

「私はコーヒーが大好きなので、どんなに忙しい時でも必ずコーヒーを飲むようにしています。豆から挽く本格的なことはしていませんが、子供がまだ寝ている時間にゆっくりコーヒーを淹れ、朝のスイッチを入れて一日頑張ろうと気合を入れています。コーヒーに砂糖やミルクを入れるのがあまり好きではないので、ブラックコーヒーと一緒にお菓子を食べるのも好きですね。あと、外出がなかなか思うようにできない状況なので、おうち時間を少し贅沢にしたくて朝食のパンに、バターとシナモンとはちみつをかけて食べることにハマっています。コロナの影響で一時期バターが品薄になって手に入らなかった時は、かなりショックでした。子供と一緒に食べようとこのやり方を勧めてみたのですが、誰も共感してくれず、子供達は何もつけずに素材の味を生かして食べていましたね(笑)。」

―これからの目標を教えて下さい。

「新人ケアマネとしてまずは、利用者とその家族が抱える潜在的課題が見つけられるようになりたいです。」

写真：徳村こゆき
インタビュー：戸田亜由美

Since2019.4

SPECIAL INTERVIEW 2

野辺田　萌

MOE NOBETA

2019年3月 西九州大学卒業後、当法人へ入職。社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士の資格を有する。マイペースなところがあるが、周りの事をよく見ており気遣いができる。上司は『未熟な所もまだまだあるが、利用者や家族に寄り添うことは誰にも負けていない。これからは、もっと自信を持って仕事に取り組んで欲しい。』と今後の活躍に期待を寄せている。

―― 医療・福祉の道を選んだきっかけを教えて下さい。

「ありきたりだと思われるかもしれませんが、中学生の時に入院をし、その時のソーシャルワーカーの方が、中学生の私と話をする時は目線を同じにして、たわいもないことで笑っていたのに、申し送り等で専門用語を使い、真剣に話をしているプロの姿を見た時はとてもかっこよく、私もこんな風になりたいと思ったのがきっかけです。入院した時は『なんで自分だけ』と思うことがよくあり、気持ちが沈んでしまっていました。そんな時、病院のスタッフの方達がたくさん話を聞いてくれたり、勉強を教えてくれたりしたおかげで、ネガティブな気持ちを少しずつ切り替えられるようになっていきました。そんな経験があったからこそ『誰かの助けになりたい』という気持ちが強くなり、福祉の道に進もうと思いました。」

―― ふるさとの森を選んだのはなぜですか?

「ふるさとの森以外も見学や面接に行きました。そこで『まだ就職先を決めていないの』と言われたことがあり、就職活動することに焦りと不安を抱いてしまうようになりました。そんな中、ふるさとの森の求人を見つけ、施設見学で雰囲気が良かったので、面接を受けました。面接時は緊張を与えないように優しく話してもらえ、今まで面接を受けてきた中で一番自分の言葉で話をすることができました。勤務していく中で、訪問先や送迎で外出する時、『いってらっしゃい』や『おかえり』と言ってもらいます。何気ない言葉ですが、とても温かみがあります。そんな先輩たちに囲まれて仕事ができていることが幸せです。」

―― 仕事をする上で大切にしていることは何ですか?

「相談員として利用者の話を聞き、利用者の気持ちを汲み取るということを一番大切にしています。あとは事務所職員として目配り・気配り・心配りを心掛け、電話対応や来客対応も積極的に行うようにしています。最初は事務員さんの仕事だと思っていたのですが、お金の計算など細かい作業をしている時があるので、そういった姿を見た時は途中で手を止めないで済むようにと思っています。」

―― リフレッシュの方法を教えて下さい。

「自然が好きなので、友達と一緒に山や川に行ってボーッとすることが好きです。自然の中にいると心が落ち着くんですよね。最近では、私の誕生日の時に友達3人で山登りをしました。前から行ってみたかったお店のランチボックスをテイクアウトし、それを頂上で食べることを目標に頑張りました。そんなに高い山ではなかったのですが、頂上でご飯を食べている間に体が冷えて、あまりの寒さにご飯どころではなくなってしまい、完食せずに下山しました(笑)。」

―― 今後の目標や目標とする人はいますか?

「念願の社会福祉士の資格取得ができました!今後は視野を広げて仕事ができればいいなと思います。あと、目標とする人は地域連携支援室の室長です。上司だからというわけではなく、子育てをしながら仕事も時間内に終わらせている姿は本当に凄いと思います。上司なのでビシッと言わないといけない時もあると思いますが、最後は味方をしてくれます。そんな室長が私の憧れです!」

Since2008.9

SPECIAL INTERVIEW 12

桶谷 美波

MINAMI OKEYA

感染対策委員会委員長であり、看護課 主任として部下をまとめている。コミュニケーション力が高く誰とでも気さくに話し笑顔が絶えない。また、二人の子供を育てるワーキングマザーで、子育てと仕事の両立に奮闘している。

写真：徳村こゆき
インタビュー：戸田亜由美

―― 医療・福祉の仕事を選んだのはなぜですか?

「高校生の時にヘルパー2級の資格を取得したので、介護職を目指すつもりでいました。介護施設の面接を受けた時に看護師の勉強をしてみないかと誘われたのがきっかけで、介護の仕事をしながら看護学校へ行くようになりました。准看護師の資格を取得してから一時期、医療福祉の仕事から離れてスーパーのレジ打ちをしていた時がありました。そんな時に、ふるさとの森で働いていた同級生から、『看護師の資格を持っているのにレジ打ちしているのはもったいない』と言われ、ふるさとの森の見学だけでも行ってみないかと誘われました。それがきっかけでふるさとの森に縁があり、あっという間に12年が経ちました。今でも自分に看護師の仕事が合っているのか分からない時がありますが。でも、スーパーで働いている時、店内が寒すぎて足がつりそうになりながら仕事をしていた時を考えると、自分には看護師の方が合っているなと思います(笑)。」

―― これまで勤務してきた中で一番印象に残っていることは何ですか?

「看護師の人数が少なくて2階と3階で日勤が一人という時がありました。その時は、泣きそうになりながら勤務していた記憶があります(笑)。今は看護師の人数も増えて、だいぶ余裕ができました。」

―― コロナの流行に伴い、感染対策委員として苦労したことなどあれば教えて下さい。

「感染対策委員会の委員長として約4年が経ちます。これまでは、前年のデータなどを活用し評価・反省をしていましたが、コロナは前例のない未知のウイルスです。全員に周知・実践してもらわないといけないので、1からのマニュアル作りは苦戦しました。施設、家族、地域の生活を守ることがこんなに大変だと感じたことはありません。今までの知識を駆使して感染対策に努めているつもりです。もしコロナの感染者が出た場合、“しないでかかる”より“してかかる”のとでは違います。今の対策に不安や不満、無駄なこともあるかもしれません。今が踏ん張りどころだと思います。まだまだ気を緩めることはできませんが、早く終息の日を迎えて欲しいですね。終息したら1週間飲み歩きたい気分です(笑)。今は我慢!」

―― おうち時間が増えたと思いますが、どのように過ごされていますか?

「特に何かをしているというわけではありませんが、休みの日はゆっくり過ごしています。強いて言えば、今までより家にいる時間が増え掃除機をよくかけるようになりました。うちは娘が二人います。私含め女子は髪の毛が長いので、落ちているとすごく気になります。ゴロゴロしていても落ちている髪の毛を見かけると、気づいた時には掃除機を手にしています(笑)。家電マニアではないのですが、よく掃除機を使うようになり、新製品が出ると気になってしまいます。今では我が家に掃除機が3台もあります(笑)。」

―― 後輩たちへのメッセージをお願いします。

「看護課は幅広い年齢層が在籍しています。自分の中の上司像は、ビシッと物事を言う上司がいたり、話しやすい上司がいたりして良いと思っています。自分では相談しやすい上司でいたいと思っています。周りもそう思ってくれていたら嬉しいです。」

Since1998.6

SPECIAL INTERVIEW 20

馬場　玲子

REIKO BABA

長年の経験と知識から「分からないことがあったら馬場さんに」と言われるくらい頼りになる存在。休日はプールやジムに通い運動不足の解消に努めている。いつまでも仕事ができる気力と体力の充実に努め、認知症にならないことが今の一番の目標としている。

―― 20年間で一番印象に残っていることは何ですか?

「施設では色々なイベントがあり沢山の思い出がありますが、何といっても開設当初の夏祭りです。町内からたくさんの来賓を迎えて開催していたので、職員それぞれが準備の為に連日遅くまで頑張り、大盛況で終わった時には達成感や充実感を覚えました。最近では防犯カメラの設置がありましたが、これについて思い出すことがあります。ある秋の休日の夕暮れ時、入所者が夕食時に離設したことがあり、緊急招集を受けました。私は、懐中電灯を持ってみかん畑を探し回りました。いよいよ警察に捜索願をと家族と連絡を取り合っている時に、バスの運転席の横に乗っている本人を発見したと国道を探していた職員から報告が入り大事には至らずに済みました。全国的にも認知症老人の行方不明者が年々増加しているというニュースを見ますが、防犯カメラを設置することにより、今後のリスク管理に有効になればと思います。」

―― 仕事のやりがいは何ですか?

「私は高校卒業後に大阪で事務職を始めてから、50年近く事務の仕事をしています。大阪から帰ってきて太良町にある医院で事務をしていましたが、母親の介護の為に退職をしました。その後、再就職したのが鹿島にある工場でした。その会社で東京に行くように言われたのですが、東京までは行けなかったのでとりあえず現場に入るように言われ工場の流れ作業の仕事をしました。これがまぁ自分にとっては苦でしかなく一週間でその会社を退職しましたよ(笑)。その時に、自分は物を相手にするより、人を相手にする仕事が向いていると確信しました。だから、事務職は私にとって天職と言える仕事です。

事務の仕事は多岐に渡り、施設運営にとって大変重要です。特に、毎月の請求書作成は、収入があってこそ施設が回りますので、職員の頑張りが無駄にならないように気を使いますし、返戻等が無かった時はほっとします。その為、報告や連絡等がなかった時など、きつく言ったりしてしまいますがご勘弁下さい。また、利用者や家族の方から『あんたがいてくれて良かった』と言っていただけた時は嬉しく思います。」

―― 長年勤めてきて大切にしてきたことは何ですか?

「職員の人数が少なかったのもありますが、担当の仕事以外でも“自分で出来ることは何でもする”ということを入職した時から心がけています。思い出すのは、通所の送迎に行った時に西日がまぶしくて運転しにくく、運転席のドアを開けて道路を確認しながら運転したことがあります。今思うと危ないですよね(笑)。この時初めてサングラスをかけて運転したいと思いましたよ。」

―― 後輩たちへのメッセージをお願いします。

「入職時はパソコンも触ったことがなく、そろばんでレシートの清算もしていたくらいです。パソコンもスマホも使えるようになり、ここまで続けてこられたのも皆さんのおかげです。“石の上にも三年”という諺がありますが、経験をつむことで仕事を覚えていきます。仕事で失敗してしまっても良い勉強をさせていただいたと思って次につなげていき、ふるさとの森で活躍してください。」

Since1998.7

SPECIAL INTERVIEW 20

尾島 弘美

HIROMI OJIMA

誰にでも優しくそっと寄り添ってくれるので、「新入社員の時に緊張していてどうしていいか分からなかった時に話しかけてもらい、すごく救われた。」と話す職員がいるくらい。最近では、グッピーやメダカのお世話をするのが楽しく、家族には“メダカの学校の先生”と冷やかされているそう。

―介護の仕事を始めたきっかけは何ですか?

「社会人になって初めて勤務したのは、陸上自衛隊の敷地内にある売店でした。20歳前後だったので短パンで出勤したら偉い人に呼び出されて「刺激するような格好は控えて下さい。」と叱られたことがありますね(笑)。この他にも百合の花を育てたり、事務職をしたり、20代は色々な仕事をしてきました。そんな中、癌で闘病中の祖父の体を拭いたり、尿器を当てたりして看病するようになりました。これが全然苦ではなく、自分は人に関わる仕事ができるのではないかと思うようになりました。そんな時にふるさとの森が開設することを知り、応募したのがきっかけです。当時は、無知識だし無資格でした。」

―20年間で印象に残っていることはありますか?

「1年目は通所、2年目は2階、3~5年目は3階勤務でした。当時はよくバスハイクでコスモスを見に行ったり、祐徳神社や轟の滝なども行きました。事前にトイレの場所を確認したり、危ない場所はないかなど下見に行って計画を立て、準備は大変でしたが、一緒に行った利用者が何年経ってもこのことを覚えてくれることはすごく嬉しかったですね。日常ではないことをしてあげられたことで『ありがとう』や『楽しかった』が積み重なっていき、利用者の満足につながっていったのではないかなと思います。あと、当時はスタッフの人数も十分ではなかったので、リハ助手もした経験がありますよ。とにかく色んなことをした思い出があります。」

―後輩たちへのメッセージをお願いします。

「介護の仕事は資格を取ってスキルアップができます。私が介護福祉士の資格を取る時は、実技試験でのお題が「右麻痺の方の更衣」でした。試験当日はすごく緊張していたことを覚えています。頭の中でイメージをし、いざ試験会場へ入った瞬間、目に映ったのは浴衣姿の利用者役でした。私の中ではパジャマを着ている想定でしたが、予想外の浴衣姿を見た瞬間に頭の中が真っ白に。あっという間にタイムリミットの5分が過ぎました。試験には合格することができましたが、あの時の事は強く印象に残っています。どんなこともそうですが、先入観を持ってしまうと想定外のことが起きた時にパニックになってしまうので、考えすぎないことも大切だと思います。それから2年後、ケアマネの資格を取りました。試験を受ける後輩たちへアドバイスしてきたことは、私が試験を受ける時は、運転中でも助手席に問題集を置き、赤信号で止まる度に1問解く。そのくらい真剣に勉強しないと合格できないよと。

介護の現場で働いていると、どうしても業務に追われてしまうことがあると思います。私は利用者の心に残るようなお手伝いができればいいなと考えながら仕事をしていました。せっかく人と関わることができる仕事をしているのだから、寄り添う時間を作り、一緒に楽しむことができれば利用者にとっても自分にとっても最高の時間が過ごせると思います。

今は、アクティビティも充実しているふるさとの森で、体磨きも楽しんでいます。皆さんもぜひご一緒に!」